


第二部

現在日本・韓国で
勤めている
オブレート会士



ORDER OF FIRST OBLATION / 初誓願 / 年代順

09/08/1946	HARR Richard	
09/08/1947	VAN HOYDONCK Jan	
09/08/1947	TOSA Xavier	土佐 義和
09/08/1948	SIMONS Leonard	
09/08/1948	SILVER Bertram	
09/08/1949	MAHONEY John Kenney	
08/15/1952	MAHER Thomas	
09/08/1952	WILLIAMS Edward	
08/02/1958	BOURGON Raymond	
09/08/1958	YAMASAKI Michael	山崎 聡一郎
09/08/1958	ISUI Leonard	乾 盛太
09/08/1958	SIANI Angelo	
08/15/1959	MAHER William	
09/08/1960	IYO John	磯 義 隆二
08/15/1961	NOVOTNY Jerome	
09/08/1962	DEELY John	
09/08/1964	HAHN Francis	
06/24/1972	LAGUIDAO Wenceslao	
09/15/1983	BORDO Vincenzo	
09/15/1983	CONCARDI Mauro	
09/29/1984	ZEVOLA Giovanni	
09/08/1985	KAWAGUCHI Leo	川口 敏
09/29/1985	GIORGIANNI Maurizio	
09/08/1986	PEIRISPULLE Jude	
09/08/1986	ROZAIRO Bradley	
03/20/1987	YAGI Nobuhiko	八木 信彦
09/08/1989	JEYACHANDRAN James	
05/21/1991	DEL ROSARIO Jaime	

私の日本での生活と仕事の履歴

リチャード・ハー



来日当時

私は日本への派遣を46年前に受けました。その時はこの国について、この国の人々について又、日本の教会が立ち向かっているチャレンジについて、殆ど何も知りませんでした。私の前に日本に来た8人のオプレート会員を知っていたので、その人達と働くのを期待していました。

私は日本語を全然知りませんでした。そして将来のために必要なので、東京で日本語の集中講義を受けていましたが、6ヶ月しか勉強できずに、新しく建てた福岡市内の那珂町（後で光丘に改名）教会に任命されました。

その時には沢山の事が殆どわからなかったから、「にここ」しか出来ませんでした。だんだん私の舌が柔らかくなって、私の教会の信者たちと少し通じ合うことが出来ました。その最初のときは喜び一杯でしたが、苦勞の日々でした。光丘に2年いて、私は福岡の古賀教会に派遣されて8年おりました。そして徳島阿南に2年いて、院長はまた私

を福岡の光丘教会に派遣しました。その後、伊丹教会で働いたこともあり、今は阿南の主任司祭です。1997年4月から安芸教会に行きました。

私の夢は深い聖体の信心、尊敬の習慣を信者の皆に推めたいということです。私がこの点では良い道具になったかどうか、神様しか教えることは出来ません。私はオプレート会のメンバーであり、この宣教の仕事が出来るのはいつも大へん幸せであると思っています。私の残りの年は、神様の栄光のために働きながら、日本で過ごしたいと希望しています。



現在

日本 1953...

ヤン・ヴァン・ホイドンク

他の処で、私に対する神の摂理について書きました。その摂理の導きは常にあったし、大いに信じています。従って私は、オプレート会ではアメリカ以外の外国から初めて来日した宣教師です。折しもバイクの事故で頭の骨を折りました。1952年9月26日のバイクの事故の怪我からまだ治りきらずに私は日本に来て、1953年8月21日、神戸港に着きました。



来日当時

どうしても必要な日本語の勉強をしてから、高知の中島町教会の助任司祭に任命されました。その任務は1963年まで続きました。

1963年7月に、私は新しい任命をもらい、それは新しく建てた東京の修学院で司祭になる神学生を養成するための仕事でした。バット・ヒーリ院長の補佐としてでした。東京の神学院にもっと居るつもりでしたが、1年後、大阪の田口司教から大阪教区の短期大学の英語の先生としての依頼がありました。17年間大阪の学校で教えながら、伊丹教会の助任司祭として勤めました。そして短大から大学が変わって、私の肩書きは非常勤から助教授、教授になりました。大学でもっと良い仕事出来るために大阪大学に入り、2年後に英語の語学の修士を取りました。

もう1回引越さなければなりません。それは神戸のみ心教会の外国人共同体のチャプレンの仕事に頼まれたからでした。神戸に引越しましたが、大学でもまだ教えました。スケジュールは一週間の半分で大学の仕事を済ませ、あとはみ心教会と伊丹教会での司牧をしました。

その後、福岡の光丘教会の主任司祭になりました。この

新しい割合に大きい共同体を指導するのはなかなか慣れなかったもので、2年経たないうち、この仕事をやめさせてもらいたいと頼みました。1982年11月に徳島教会の助任司祭になりました。

突然、もう一つの助けを求める呼び掛けが神戸からきました。海星センターからの呼出しでした。向こうは神戸港のための新しいカトリックのチャプレンを探していました。私の住む場所は聖公会の、船に乗る人のための建物の一番上にあり、ほぼ毎日、私は神戸港に行っているいろんな船を訪問して、カトリック信者に会って、その人たちのニード、人権の闘いのために手伝いました。更に2年後、神戸から阿波池田の教会に引越しました。ここでこの仕事は、四国教区のためとオプレート会管区のために、事務の仕事も今でもしています。

1976年の始めから、私はカイロプラクティックの技術を伊丹の近くの西宮に住んでいるアメリカの友人から習いました。その時から、私は数百人の苦しみを治す事が出来ました。苦しみにによって覆われている目が、もう一度笑う目になるのを見るのはうれしい事です。

この40年以上日本で司牧している宣教師の価値観は何でしょうか。前に言ったように、小さい時から私は神の導きを意識しています。今振り返ってみると、私が司祭になり、オプレート会員になり、日本に来て日本の中の色々な集いに関わる等のことを考えながら、神様のみ手がいづも入って下さっていることに気付きます。時々苦しかったが、ほとんどの時私は喜びをもって満足しています。私の心の中に時々残っている質問は「神様の指導に十分応えましたか？」ということです。最後に主が呼び出して下さる時に、これに答えて下さるでしょう。それが喜びの答えであるようにお祈りいたします。

できる限り、阿波池田からいろいろな手伝いをしたいと思います。



現在



来日当時

時は水のように流動的で、流れるものです。水は止め、または固めることが出来ますが、時は止めることも出来ず、つかむこともできません。時を自分のものにし、所有することは不可能です…。40年前フランダース(ベルギー)から日本に渡った私はロマンチックな夢を持つ28才の宣教師でした。何度も時を止めたかった。

2年間、東京で日本語を学んでから、高知県の東の方、安芸市へ派遣されました。今まで高知以外に住んだことはありません。それで1979年に帰化したとき、「土佐」という日本名を選びました。安芸市に滞在中、4年間地元の中・高校へ通いました。同じ小さい机の前でティーンエイジャー達と一緒に国語、社会科、習字などを学ぼうとしましたが…それは本当の日本の社会のありのままを、司祭館の窓からではなく、日本についての本からではなく、日本の社会の中から学びたかったからです。

9年後、赤岡町に転住して、遠くないところに「特別」の学校が

昨日もう一度

土佐 義和

あると聞きました。それは県立教護院です。現在までそこで非行少年少女達に中学の英語を教えています…その時からもう30年が流れてしまいました。授業以外に夏のキャンプ、秋の運動会、冬のサンタクロース、春の遠足などのイベントに参加して、先生たちや生徒たちに福音的な価値観を証しする機会が多く、教護院の先生たちと一緒に子どもたちのために働くことで、日本の社会の明るい面も、暗い面も知りました。「隣人を愛しなさい」はカトリック教会の独占ではないことを悟りました。私が高知県に来る前に、神様がすでに日本の社会で働いていらっしやることをはっきり知りました。

このように、成長して、正義と平和協議会の活動とのかかわりを段々と深めました。自然保護や人権や平和のために働くことは、私にとって活動ではなく、福音の要求そのものです。帰化した理由は？私の周りの人々により近づき、その悲しみと喜びをより誠実に共にする心構えからでした。「義」と「和」を合わせて、私の「クリスチャン」としての名前としました…。

それももう18年が経ってしまいました。昨日がもう一度あれば……。



現在

日本!

レオナルド・シモンズ



来日当時

日本!私が大神学校を終わった時に、私の派遣書にこの言葉が書いてありました。日本に行く考えを受け入れることが出来るまで、大分時間がかかりました。大神学校の院長の意見は、私はザイルに行けば一番良いのではないかと、ということでした。私の最初の考えは、日本では私の道具箱はあまり値打ちがないのではないかと、アフリカに行けばその才能をもっと生かせるのではないかと、ということでした。とにかく日本に行くので、ルーベイン大学のあと1年間で心理学、英語と東洋の歴史を勉強することが出来たのは幸いでした。1955年8月15日、スエズ丸が横浜港に着きました。船から花火が見えました。翌日昼頃、船から降りることが出来ました。船が一日早く着いたので、迎えの人はいなかったが、幸いに私は中央協議会の住所を持っていました。少しフランス語が出来た向井良吉さんが、タクシーの運転手に私の行きたい所を説明して下さい、中央協議会に行き、そこで私の高等学校の先生であったスクート会のベルビルゲン神父に会いました。

私は最初のクリスマス、徳島でプレイティ神父と共に過ごしました。窓を開けなくても家の中に十分な空気が入りました。家の中には暖房がなく、その代わりに外はもっと暖かでした。東京で2年間の語学の勉強が終わってから、私は江ノ口教会に行きました。どういう意味かわからなかったが、

着任した時、「全部問題は解決しました。あなたは問題を起こさないように」という指導をもらいました。私はレジオマリア・クワイアと侍者の仕事をもらい、6つの結核の病院の訪問をしなければなりません。公教要理を教えることは許してくれませんでした。

1962年7月に阿波池田に行きました。司祭館は、40平方メートル以外は野原の動物と藁のための家畜小屋のようでした。教会には窓と床がなく、土地の境界線ははっきりしませんでした。徳島からもらった古いボロの、軍用のジープでステイブンス神父と一緒にあちこちの山を駆けまわりました。1964年9月、江ノ口教会に帰りました。

1966年7月、大きな移動で私は古賀教会に行き、初めて幼稚園に関係しました。1968年、色々な事が起こって、1969年3月に赤岡教会に行きました。赤岡は100名以上の教会であると教えられていました。けれど最初の日曜日は15人程しか来なかったもので、私は100人を待ちましたが、これ位しか来ないよ、と教えてくれました。

1973年12月に、社会福祉のグループを始めました。1973年3月に、高知ボランティア育成会がスタートしました。翌年、最初のボランティア講座を聖母幼稚園のホールで開きました。1975年6月に、高知ボランティアビューローが聖母幼稚園の二階の小さい部屋でスタートしました。そして1980年、そのボランティアビューローを江ノ口教会に移しました。

1975年7月、管区長の依頼で古賀に行きました。大きな問題が幼稚園にあったので、論争上の問題の解決のために管区長と一緒に来て下さい、と頼まれました。なぜなら、法律的と感情的な問題が入り混じってめっちゃめっちゃになっていました。

1978年3月に赤岡に帰りました。なお、ブルゴス会のシリロ神父がエマウスのグループから離れた時に、私はあと2年そのグループを続けました。けれども他の仕事で忙しくなって、1992年3月31日にエマウス運動は止めました。私が古賀から帰った時、ある親たちのグループに教育の研究会を作ってくださいと頼まれ、1980年に親業(P.E.T.)のグループを始めました。今49回目の口座を無事に終わりました。1985年にあるグループと一緒に話し合いをして、救急電話サービスが必要ではないかということになり、1986年5月5日に



現在

「心のダイヤル」を始めました。

1989年7月、青詩の家をスタートするために、赤岡の古い保育園を改造し、12月8日開所しました。この家を開く前にも、援助の必要な女性や男の子をも援助しました。未婚で妊娠した娘さん6人も手伝い、そのうち4人の子供は里子に

出し、2人は母親が育てています。又他のまだ生まれていない2人は考え中で、決まっていません。他の仕事としては、1967年から1971年に古賀の看護婦学校で英語を教え、1980年から1990年まで高知工専で英語を教え、土佐リハビリ大学校でも教えました。

私と鳴門

ベルトラム・シルバー



東日出崎

1948年、その年私はイブスウィッチで修練期を終わりました。それからワシントンでオペレート会の大学（大神学校）での勉強が始まりました。大神学校に着いた時に、ギル神父様は日本のミッションを始めるために、日本への旅行に必要な荷物を準備している所でした。ある意味でその事は、私の日本に行く宣教師の召し出しの始まりの時期であったと感じます。叙階式の2年前から院長のハント神父様

は、ジョン・マホニ、ダン・ウォード、ビル・デンゾーそして私に、ジョージタウン大学に日本語の勉強のために行く許しを与えました。その2年のうちに日本への派遣をもらうかな、ということしか考えませんでした。

その9月に、東京で日本語の語学のクラスで勉強を始めました。一年半余り後、私はオペレート会の伊丹のミッションを始めていました。「知らぬが仏」でその一年は全然知らないから、楽にすごしました。そして、四国の徳島教会にパット・ブレイディ神父様の助任司祭として行きました。その年に建てる予定の鳴門は徳島教会の巡回教会として始めるつもりでした。その教会の最初の責任者として行きました。私はその時全く知る由もありませんでした、鳴門のミッションとして30年以上住むということ。

鳴門はある時、塩田面積が70%を占めていました。残りの土地は農業を営み、鳴門金時、れんこん、大根等野菜を作っていました。市の教育設備はすばらしく、現在国立大学があり、先生と学生は日本中から、又外国からも来ます。大塚製薬は市の一番大きな会社で、トップクラスの仕事を人々を全国から雇います。次の大きな仕

事は鳴門競艇です。

鳴門教会は今、市の郊外にあります。以前は市内の中心にありました。この共同体が始まったのはブラザー津田が戦争の間、東京から来て以来です。（津田氏についての記事を参考）鳴門共同体が始まり、巡回教会が始まりました。大村さんの家から市役所の近くへ移動し、後である塾の部屋を借り、市内の中央に最初のカトリック幼稚園と司祭館が出来ました。現在の場所には、カトリック信者が自分たちの聖堂ということの出来る小さい聖堂があります。最初の信者たちはキリストの弟子になるために、ひどい個人的な迫害を受けました。今のところはこの精神は変わったが、いまでもキリスト教に無関心の風土があります。鳴門の大部分の人々にとって、仏教が唯一の宗教です。他の宗教は大目に見られています。鳴門には、他のキリスト教の教会は三つの小さい教会しかありません。鳴門で信者たちと一緒に長年暮らした一番の喜びは、困難と喜びの時に一緒に居たことです。

ある時は、この小教区は鳴門の人だけでした。今はだいぶ変わりました。大部分は他から来た人たちでした。鳴門の人たちにはよいチャレンジでした。ある時は難民キャンプがありました。今、ペルーからの8人とフィリピン人の一大家族がいます。鳴門大学から数人の韓国人とフィリピン人もこの共同体に来ています。鳴門の共同体はいつも男性の率が多く、日本の教会では例外的でした。この小教区から2人のオペレート会の司祭に恵まれました。乾神父と硫黄神父で、そして又、他の2人の若者はオペレート会の生活をしばらくの間試してみましたが、その一人は今教会の聖体奉仕者をしています。神が彼らをこの共同体から呼び出して下さったのは、私の大きな喜びの一つです。何か珍しくミサの役割をする男の子が多かったです。

私の鳴門での宣教師としての経験上、宣教の仕事のために一つの根拠の必要性を感じます。私はそれを小教区の中に見出します。その立場からオペレート会の共同体



現在

とつながりがあって、私はオブレート会のカリスマ「キリスト教の信仰をまだ持っていない人の所へ行きキリスト共同体を作る役割」によって働きます。現代は私たちが

信仰を持って行くより、キリストをその人たちの中に見つけるのを助けます。一どちらでも！私たちの共同体は小さくても、県のレベルと司教区のレベルでよく協力するグループです。社会と教会の変化によく順応します。長年沢山のオブレート会の人たちが私と一緒に住んで、鳴門での苦勞を私と一緒にしたことを感謝したいと思います。ザベリオ会のシスター達、ノートルダム会のシスター、聖ヨゼフ会のシスターの手伝いなしには、今までの仕事は出来なかったでしょう。私が他の宣教の仕事をするのにこの共同体の理解がありました。大学教師、ライオンズクラブ、英語の教師、公的な県の警察と裁判所の通訳の仕事、一番大きな仕事は幼稚園です。

鳴門での50年の仕事の後、まだ沢山の仕事が残っています。“宣教師”の仕事は信じられないチャレンジがあります。一つひとつは新しいし、喜びと悲しみが含まれています。けれども、それは私たちオブレート会の生活ではありませんか！



聖ウジェーン

ジョン・ケニ・マホニ

汚れなきマリアの献身宣教会(オブレート会)の創立者が教皇ヨハネ・パウロ2世により、1995年12月3日、列聖され、創立者は聖ウジェーンとなりました。私は、教皇様が「ウジェーン・ド・マズノは、全教会の聖人である」と宣言されたとき、サン・ピエトロ大聖堂にいたのです。

これは紛れもなく、私の人生で最も重要な出来事でした。私は、この神聖な歴史的行事に参加するための日本からローマへの巡礼団の一員でした。まず、プログラムの一番初めは若者の祭典で、12月2日、教皇パウロ6世ホールで開催されました。6千人入れるホールは満席で、前方の席は世界中から集まった2千人の熱狂的な若者達で占められていました(オブレート会は、68ヶ国で活動しています)。彼等は、マルセイユとエクス・アン・プロヴァンスの若者達と共に、聖ウジェーンの偉業を賛えるために集まったのです。彼等の素晴らしい音楽会でも明らかですが、彼等は、聖ウジェーンは若者と若者と共に働く者たちの鑑であると信じているのです。

列聖式は12月3日に行われました。私たちのグループは、とても良い席でこの美しい儀式の全てを見聞きすることが出来ました。この日の朝のサン・ピエトロ広場には、一万人以上の人々が集まりましたので、全ての人が幸運だった訳ではないでしょう。オブレート会の一員として、教皇



聖ウジェーン・ド・マズノ(オブレート会創立者)



来日当時

ヨハネ・パウロ2世が、「福者ウジェーンは教会の聖人である」と言われたその瞬間は、とても感激的で刺激的でした。12月4日、オブレート会の面々は、感謝のミサの為、城壁外のサン・パウロ大聖堂に集まりました。これもまた感激的な経験でした。世界中から集まった8百人以上のオブレート会のメンバーが、共にミサを捧げたのです。入祭行列には20分以上もかかりました。ミサ後はオブレート会の本部で夕食会でした。これは言うまでもないでしょうが、立食形式でした。イタリアのお菓子はとてもおいしくて、私はお菓子のテーブルに2回も足を運びました。その夜は、長い間会っていなかったオブレート会の友人達に会う事が

出来ました。とても大勢の人がいたので、一人一人とじっくり話をする事は出来ませんでしたが、各々の顔とその笑顔には、オブレート会の一員である喜びが溢れていました。

パリのゼネストのために、私たちの旅行の予定は少し変わりました。私たちはバスでローマからアジジに行き、少しの闊見学をして、再びバスでマルセイユへ、そして翌朝、エクス・アン・プロヴァンスへ向かいました。聖ウジェーンはここで生まれ、オブレート会もここで生まれました。ド・マズノ神父に5人の神父方が加わって、最初のオブレート共同体が出来たのです。

その日の午後、私たちはマルセイユに戻りました。ここでまず立ちよったのは、ノートル・ダム・ド・ラ・ガルド聖堂でした。ド・マズノ司教が建てられたこの教会は、マルセイユの港を見下ろす場所に在りました。そこにはマリアの御像があり、港を歩き来する旅人達を見守っています。オブレート会の初期、オブレート会の宣教師達は、この教会から世界中のあらゆる地へと宣教に出かけたのです。

12月7日の夕方、私たちはルルドに着き、マリアがベルナデッタに姿を現わされた洞窟に行くことが出来ました。マリアは、小さな泉の傍のこの場所に、ご自分を記念する聖堂を建てるようにと、この小さな少女に言われたのです。今日では、年に4百万人もの巡礼者達が、この聖地を訪れています。彼等は様々な癒しを求めてやってきます。そして皆、求めていたものとは違っていたとしても、各々、神の祝福と恵みを受けて帰って行くのです。

12月8日は、マリアの無原罪の御宿りの大祝日です。この祝日はオブレート会にとって、特別な意味を持っています。この日、ルルドの洞窟でのミサで司式司祭を務めることが出来ましたことは、私にとっては大きな喜びであり、また名誉なことでした。このミサの中で、皆さんの為にも祈りを捧げました。この日の午後、私はルルドの泉に入り(とても冷たかった!)、マリアに私の心の中にある人々のためにお祈りとお守りとをお願いしました。

この旅で、私はオブレート会の宣教師としての使命を新たに感じ、今また、聖ウジェーンの「彼等は聖人になるように励まなければならない」と言う言葉を思い出しています。これは私にとっては、聖ウジェーンの列聖からの挑戦なのです。



現在

あらゆる所に

トマス・マヘル



来日当時

私は、阿波池田と阿南以外のオブレート会の司牧する教会に、ある時は所属し、又ある時は留守番に勤めたことがあります。

私の一番長い所属は高知市の中島町教会で、25年間でした。最初は、アルコール依存症の主任司祭として、後には助任司祭か或いはそこに留ま

るだけで立場がはっきりしていませんでした。私は高知工専にパートタイムで、県立西高校では23年間教えました。今両方共退職しました。そして、25年前に高知刑務所での働きが始まりました。これは奉仕の仕事です。最初は教悔師でした。後で、篤志面接委員(英語を教える)になりその後講師として、アルコール依存・麻薬中毒について講義しました。一年前に、私は中村教会の主任司祭として任命されました。中村教会は、輪多郡全部を含み、たいへん美しい広い地域です。日本人の信者は少ないが、フィリピン人の花嫁が19人もこの教会の範囲に住んでいて、最近亡くなったスティーブンス神父様は、彼女たちを探し出し愛をこめてよく気を配り、彼女たちが信仰を失ってしまわな

いように十分な世話をしました。この教会での仕事には買い物、料理も含まれています。

私の生活の大きな転換の時期は、1976年ミネソタ州ロチェスター市の治療センターゲストハウス(司祭、修道者、シスターの治療所)に滞在したときでした。アルコール依存の病気は神様からの特別な贈り物です。この経験はそれまで気付かなかった沢山の窓を開けて下さいました。例えば、精神病院や刑務所を訪れる時、私の経験と力と希望を沢山のひとと分かち合うことが出来るのです。私のホーム・グループは高知にあり、毎週二回例会に参加します。

今どう感じていますか? 私は若い気分です。最近ある子どもは私の背中を指差して「そこに何が入っているの」と聞きましたが、太っていてもまだ若い気持ちを持っています。そして髪について話せば、「まあまあ」だけです。……けれども心は若く、まだがんばりたいのです。来週新しい自動車ももらいます。本田インテグラSJ = Sedan Joyfull



現在

時の流れ

エドワード・ウィリアムス



来日当時

40年間をたった1ページに凝縮するのは、とても大変なことです。何処から始めましょうか。やはり、最初からでしょう。1958年9月17日午前10時、場所は東京、羽田空港です。空港から、トム・マヘル神父と私は迎えのデイヴ・バートン神父、ジョー・ホフマンズ神父と一緒に、東京のオブレ

ート会の滞在先である、カトリック中央協議会の敷地内にある住宅に向かいました。私たちはその日、壁のほうを向き、ラテン語で聖歌は歌わないで、各々にミサをあげました。その後40年間、典礼は大変長い道のりを旅してきました。明朝、おいで頂いた神父様方と共に捧げるミサは日本語で、会衆の方を向き、始めの十字架から最後の派遣まで、聖歌と共に行われるのです。

東京・六本木にあるフランシスコ会の語学学校で日本語の勉強を2年間しましたが、その後も幸運なことに、7年間、日本語の先生が週3回教会に来て下さって教えて下さいました。しかしそれでもやはり、初めの何年間かの私の説教は、他の神父様方の多くと同様に、中央協議会がローマ字で用意してくれる説教を読む、というものでした。当時、私たちは皆黒いスータンを着ていましたが、今では殆ど着る人はいません。初めの頃、私たちは殆ど例外なく「カテキズム」を教えていましたが、後年は何処でも「聖書」に重きを置くようになってきました。私たちオブレート会宣教師は皆若く、一つの教区に

2人いて、活力に溢れ、高い望みを抱いていました。高い望みはまだ残っていますが、40年たって経験という財産は大いに増えましたが、一方で、活力の方は随分と落ちました。そして今は、各々の場所にだいたい1人で、利益と不利益との両方を受けています。5人の教皇が教皇の座に就かれ、第二ヴァチカン公会議によって新風が吹き、先に挙げたような変化がもたらされました。私個人は各地のオブレート会からの任を受けて、鳴門、福岡の光が丘、伊丹、高知の中島町、徳島と、様々な土地に赴任しました。各々の場所で、沢山の素晴らしい方々に出会い、素晴らしい思い出を得ることが出来ました。そしてもちろん、次の教会に移る度に、大きな悲しみも得ましたし、多くのものを失いました。

振り返って見ますと、悲しみよりも喜びの方が、はるかに大きいように思われます。将来を見ますと、今、イタリア、フィリピン、スリランカからの若いオブレート会宣教師達が活躍されていますし、神学生も2、3人おり、私たちに加わろうかという志願者もおります。また、私たちの教区では、信者の数も増えており、「教会」のあらゆる方面への



現在

善い参加がある、ということは、オブレート会、そして日本の教会の新しい世紀における素晴らしい未来が約束されている、ということだと思います。

私は日本にやって来てよかった、と思っておりますし、また、再び同じことを試みる機会も与えられておりますことを嬉しく思っております。

今は年を取り、白髪が増えてしまいましたが、どうか、神、私をお見捨てにならないで下さい。詩篇71:18



日本での宣教

レモン・ブルゴアン

1960年に、ローマで哲学の勉強をしていたころ、有名な司教が講演で次のようなお話をしてくれました。今迄のキリスト教は西洋で発達したので、もちろん西洋の服を着ています。アジアとアフリカの思想を加えてこそ本物のキリスト教が出来あがるでしょう、ということでした。



来日当時

その流れの中にいたい気持ちが湧いてきて、アジアや日本に目を向けました。そこへキリストをもたらすよりも、もう既にそこにいらっしゃるキリストを見い出したかったのです。そして、そのように人々を導くことが出来れば幸いです。話すよりも聴くことが重要だと思い、そういう夢を持って1961年に日本に到着しました。

神学校時代にとてもがっかりしました。日本ではもう既に神学は少なくとも、東洋的な要素が入っていると誤解していました。しかし全く西洋的なものでした。しかもオペレート会の修道生活も同じでした。

司祭になって、1年間だけ小教区に勤めてから、神学生の養成の担当になりました。全く準備が不十分だったので。しかももちろん、西洋と東洋の間の相違はまだ分からないままでした。

健康状態が悪化したため、昼間の仕事しか出来なくなったので当分の間中学校、高等学校と大学でフランス語、英語と宗教を担当し、養護施設にも勤めました。不幸中の幸いで、信者でない方々と大に関わることが出来ました。こういう体験を通じて、直接にそういう人達の中のキリストに触れることが出来ました。私の人生に大きな影響がありました。区別なく多くの人々と関わることが出来ました。

マリッジ・エンカウンターとチョイスのプログラムに参加したことは、私の救いになりました。そこで信徒と自由に自分の夢を話すことが出来て、分かり合えたからです。

現在再び養成の奉仕に関わることになりました。若者に修道生活を紹介すると共に、彼らの心の中に存在されるキリストに耳を傾けたいのです。そして彼らに合った修道生活を見つけないのです。つまり、より東洋的な修道生活を探し求めたいのです。



創立者の文献を翻訳するに当たって、気がついたことの一つは、創立者は常に相手の心の中に内在されるキリストを見ていたということです。そしてその度に自分のキリスト像を変えていきました。彼が東洋に居たとすれば、おそらく更により豊かなキリスト像を認めたでしょう。

私に与えられる残りの生涯で何を变えたいのでしょうかと聞かれると、別に何も変えたくありません、と答えます。今までと同じような人間でありたいのです。つまり常に兄弟姉妹の心の中にキリストの「広さも、長さも、高さも、深さも」探り、その影響を受けたいのです。特に取り入れられる東洋的な魅があれば、自分のものにしたいのです。度々キリスト信者でない方々の心はそれを見せてくれます。

この道で平和を見つけたし、これからもそうだろうと想像しています。人との平和を保つためには、まず自分との平和を大事にしないと成り立ちません。そして、その平和の道を進み始めたのはローマのあの司教の講演の時からだ、という気がします。

神に感謝！



現在

夢

山崎 聡一郎



飯沼当時

最初に持っていた夢……若者と関わりたかった。この夢は泰星高校の2年間と秋田の養護施設での2年間で、ほんのちょっと満たされた。

管区での最初の印象…オペレート会の中で役に立たないと思った。英語の熟が多かったから役立ったこと…古賀の問題の後、オペレート会に

対しての信用をある程度取り戻したことが、過去は戻らないので未来の夢…違ったやり方はしない。歳を取り過ぎて、夢は格別無い。

幼稚園の保護者との関わりの中で、イエズスを伝えたい。



現在

50周年記念にあたって

乾 盛夫

オペレート会の日本での宣教、50周年を記念するに当たり、私は一会員という自分と、全てを下さった神様に感謝します。また、人々の中に来て生きられる主イエスと共に、主の御国の平和を述べ伝えてくれた先輩恩人と多くの人々に、敬意とお礼とを申し上げます。



神学生時代

神様の慈しみが身一杯に息づいている主イエスは、御父の前で兄弟の荷を負う目に合われました。それが人々への御父の心に叶った尽くし方でした。この過ぎ越しによって示された慈しみを、聖ウジェーン・ド・マズノは、貧しい人々に福音を述べ伝える19世紀の教会に蘇らせるオペレート会を興してくれました。日本では、革命ではなくて、戦争の後に入った事もあり、難しい面があったかと思います。この時が一つの区切りとなって、日本での宣教が伸びることを心から祈ります。

私が今までほとんどずっと九州は古賀にいて、モンテッソーリ教育法と、とくにそれを実現する心について啓蒙してきましたのは、人間ひとりひとりの載っている生

きる力が、より本来の恵まれた姿に成長して、その人に託される生涯が神様への感謝のうちに生きられるように、乳幼児期の形成が守られるように、との思いからです。聖書のみことばがもっと自然に聴ける人が育ちますように、と期待しています。とともに、現代の子どもを取りまく環境がより健康なものになることを、子どもの力を借りながら実現できることに、神様の祝福を信じています。



現在



50年記念の歴史

アンジェロ・シアニ



来日当時

1953年に、私はニューヨーク州バッファロー市のファレン司教高等学校の宣教クラブに入りました。クラブには、私たちは全部のオブレート会の宣教地の広報がありました。私はアジアに興味がありました。4年後、マサチューセッツ州ツクスベリ市にあるオブレート会の修練所に行って、

そこで2人のすばらしい修練者、マイケル山崎とレン乾に出会って、一緒に修練期をすごしたので、日本は私にとっては行きたい処だとわかりました。私は1960年、神学生の時に、日本に行きたい、と修練長に申し出ました。けれども、叙階式のとまで、その派遣をもらえませんでした。

1965年9月16日、日本に着きました。ダン・オブライエン神父と一緒に来ました。その夜は台風と知り合いのボネ神父が買ったデコレーションケーキと二つの地震が、私たちを歓迎しました。ですから、私は果たして良い所に来たのかしらと疑いました。最初の所は、鳴門教会の助任司祭として、シルバー神父と11年間居ました。その時の仕事は、板野巡回教会、ほんざい結核病院でした。その訪問と聖母幼稚園の英語、教会の大人の英語と徳島大学、四国女子大学そして、ある工場でも英語を教えました。私の鳴門の時代はたいへん楽しいものでした。

1979年に、高知市中島町教会の主任司祭になり、2年後管区長になりました。その後修練期の院

長となり、名古屋の神学校のスタッフでした。そしてもう一度管区長になりました。今年の1月に雪が降っている或る日に、珍しいことを見ました。私の部屋の窓の外に小さな緑のインコが現われました。同じ時に寒い風から身を守りながら、黒い鳥の群れがいて、それに入りたかった様子でした。けれども、彼は全く違う色でした。その鳥たちは黒くてかっこうがよく、彼の形は丸く、緑で口先も違う形でした。その時私は、彼は1日も生き残れないと考えました。けれども、2週間後に私はびっくりしました。彼は同じ連中と共にチッチッと現われて来たのです。

時々、私は日本で働く時に緑のインコみたいな気持ちになります。私の鼻は大きいし、顔の色は違うし…けれどもそれがあっても、周りの人は受け入れて下さり、私は楽しい

のです。私は今まで沢山の成功をしたとは言えないが、だんだんと、大事な事は長い間居て神が動くことを決心なさるまで、ここで信頼して待つことだと思うようになりました。

ロビタイ神父の葬式の時に、深堀司教はこういう風に言って下さいました。「彼は私たちの間で亡くなられた」と。白柳司教様は宣教師に話された時に、「私たちとともに最後まで滞在してください」と言われました。ロビタイ神父の言葉も思い出します。多分イエズス会の宣教師の言葉を引用されたのでしょうか、「一生の間出来なかったことに応じるために、宣教師の骨は宣教地に腐るべきである」。

私はその恵みを頂くように望みます。



現在



すべては神の恵み

ウィリアム・マヘル



来日当時

私の日本での36年間の生活を今ふり返って見ると、6つの違う所に属していました。一つひとつはすごい喜びの思い出もあるし、でこぼこの道もありました。初めは新しい文化と語学のショックでした。25才でもう一度、一から始めなければなりませんでした。その後、神学校で

三つの語学(日本語、ラテン語、英語)で神学を勉強しました。最初の司牧は必要な道具(語学、知識…)なしにスタートしなければなりませんでした。

今、それらについて全部笑うことができます。けれども、もう一度日本に来るつもりであったら、私はアメリカで神学を勉強して叙階され、日本に来て語学を勉強した後、司牧生活が始まる方が良くと思います。

一つひとつの場所について考えると6つの中で、高知県中村市のミッションで17年間の教会を始めるチャレンジが一番の思い出です。けれども、徳島の8年間も私の信仰の旅の大きなステップです。中村での最初の7年は十畳の純粋な日本の家で暮らし、日本風の生き方でした。お風呂がないので、銭湯に行った経験もあります。あとの10年は小さな共同体と一緒に、新しい教会で家の中には小さな聖堂と一緒にありました。けれども、それは自分の土地、自分の教会でした。

今の徳島は中位の教会ですが、小さい中村教会から、いろいろな司牧的なチャレンジと可能性のあるこの教会に移ったのは180度の転換でした。この8年間もたくさんの良い思い出があります。

現在、古賀教会にきています。九州だから、又違う状況やチャレンジです。ここの共同体で、派遣して下さった神のみ旨に従って働きたいのです。私達は修道共同体として、古賀教会の皆さんに主の良い知らせを伝えることができるように祈ります。

私は全部の教会のたくさんの人達に感謝しなければならないし、ゆるしをこわなければなりません。このような主任司祭とつきあう人々の根気と大きな犠牲のために。けれども結局、これら全部を考えても、今何も変わらなくてもよいのです。全部の経験が私にとって貴重でした。神様は今まで私に、大変すばらしいことをしてくださいました。これからも私は、彼がお使いになりたい道で使ってくださいたら、彼と共に成長し、彼の望む目標を達することが出来るようにと神に頼みます。



現在

履歴書

硫黄 隆二

- 1930年9月6日 徳島県鳴門市に生まれる。
- 1942年12月8日 第二次世界大戦始まる。
- 1945年8月6日 広島に原子爆弾投下される。
- 同 9日 長崎に原子爆弾投下される。
- 1945年8月15日 日本の降伏によって、第二次世界



神学生時代

- 大戦は終わり、新しい時代を迎える。
- 1947年5月3日 新憲法発布と共に、新生日本は船出した。
- 1948年11月29日 ギル、マクベネット、ロビタイ神父は神戸に上陸し、高知県、徳島県の布教を目指した。
- 1949年8月15日 私は徳島教会でロビタイ神父から洗礼を受けた。
- 1951年11月3日 志願者として安芸教会に来る。
- 同26日 海の星幼稚園と教会の落成式と祝別式。

- 1955年4月 福岡サンスルビス大神学校に入学する。エセックス、ワシントン、東京神学校にて勉学に励む。
- 1964年6月14日 徳島教会で故田中司教によって、司祭に叙階された。
- 1965年8月10日 ブラジル、スザノ教会に就任する。市の人口は当時約3万人で、1万人余りが日系人であった。主に日系人への布教が目的であった。
- 1969年10月 サンパウロ、シダアドゥットラ教会に就任する。
- 1972年12月 帰国し、伊丹教会に就任する。
- 1974年12月8日 高知中島町教会に就任する。
- 1978年4月1日 安芸教会に就任。同時に海の星幼稚園々長に任命される。

安芸教会に在任したのは19年間だった。就任当時は日曜日の御ミサに10名ほど集まった時もあった。室戸での御ミサには12名ほど、又、魚梁瀬の御ミサには4人ほど集まった。しかし、現在は子供達は成長して県外に行き、老齢のため死亡する方もできるようになり、自然減少している。

幼稚園の仕事は小教区の一部としている。主に週末は教会の仕事をし、平日は幼稚園の仕事をしている。ブラジルでの毎日は司祭としての仕事に充実していた。御ミサから始まって、洗礼、病人へのご聖体、病者の塗油の秘跡、結婚式、葬式と忙しく充実した日々であった。神様が色々の危険から守って下さったことを心から感謝している。

その後2年間、伊丹の教会で司教に当り、現在福岡の吉塚の教会に務めています。



現在

命を守る運動

ジェローム・ノボトニ



東日当時

私は東京オリンピックの年、1964年の9月15日に来日し、1年間日本語を勉強した後、上智大学を4年後に卒業しました。その後、直接高知に来て、労働司祭を1年勤めました。その後、高知大学で若者と過ごし始めて、もう28年が過ぎようとしています。

中絶を思い止まった高知大学生の感謝の言葉で始まったこの日本プロ・ライフの運動は、1983年に創立しました。受精の瞬間から、寿命で自然死するまでの「命を守る」ことを目標に掲げ、中絶や安楽死で命が軽視されている現在の日本で、平和的に教育を通して、この運動を広めていきたいと日々活動しています。1987年10月に、プロ・ライフ・ニュース第1号を

発送しました。

プロ・ライフ・ニュースを毎月編集、発送することが事務所の主な活動内容となっています。それは先ず、記事作りから始まります。外国から送られて来る中絶反対ニュースの原稿を分かりやすい英文に直して、だいたい10人の翻訳者に送ります。

最近では日本人からもほつほつ記事が送られるようになってきました。又、司教様方もプロ・ライフ・ニュースのために記事を書き始めて下さっています。「生命の福音」として書いて下さった長崎教区の島本要大司教様の記事は、カトリック信者の為に今、インターネットで世界中に流れています。そして、特に、高松教区の深堀敏司教様はこの運動に心をかけて下さり、色々のご指導いただけるので、私達は力強く感じています。

教会、修道院、ミッション・スクール、ニュースを希望する一般の人には毎月、そして、全国の産婦人科、公立の中、高等学校にはローテーションを組んで、隔月ごとに5000部

ニュースを送り続けています。

事務所では、会計と資料の発送は、今年82歳になった小松俊美さんが事務所設立以来、一手に引き受けてくれています。封筒にラベルや切手をはったりして下さるのが大石露子さんと池内富美子さん。三人とも、退職後の第二の人生だと生きがいを感じてくれています。月に一回、教会の信者が御ミサの後、封筒にニュースを入れるのを最近手伝ってくれるようになりました。

ニュースの編集準備と産婦人科及び公立校の住所をコンピューターに入力し、事務所の全体的な管理をしているのが大岡滋子さん。月一回開かれる高知県性教育研究会にも参加し、必要な時はプロ・ライフの立場を説明したり、望まれば講演にも出かけています。

プロ・ライフの資料の中で、1994年5月に出版した「赤ちゃん：最初の10ヶ月の旅」は性教育とか結婚講座で使ってもらえ、ビデオの「沈黙の叫び」と同じ程、人気あるものとなりました。コンピューターの中には、出版したいパンフレットや本がまだ沢山入力されていますが、予算の関係で眠った状態になっています。

事務所では将来の活動希望として、中絶してしまった女性へのカウンセリングによるいやしと、老人問題への取組みも考えています。

皆と共に、13年間働んできたこの日本プロ・ライフ・ムーブメントの仕事が福音宣教の一つとして、私のライフ・ワークとなっています。



現在（プロ・ライフ・スタッフと共に）

ジェラード

ジョン・ディーリ



来日当時

ジェラードが亡くなって間もない今、これを書くのはとても辛いことです。彼の死にまだまだ茫然とした気持ちですが、彼がよく私をからかって「ジャック、いつになったら宣教するのか？いつになったら四国へ来て、ちゃんとした宣教活動をするのかい？」といていたのを思い出します。

ジェラードはそう言った後で、私の東京での活動について熱心に尋ねてくれたものでした。私も同じような熱心さで彼の活動について聞けなかったこと、そして私の経験……失敗や成功……についてもっと深い意味で彼と分かち合えなかったことを、今残念に思っています。

ジェリーは弱い立場にある人（隅に追いやられている人）に対する権力組織の態度に対し、立ち向かって行く構えがありました。私と仲間達がこの17年間、身体障害者職能訓練センターの人達の為に働くのではなく、彼らと共に働くのだと言う事、またこの14年間、筆者の為にではなく、彼

らと共に働くのだということを明確にするよう、度々私に助言をしてくれました。訓練センターであろうと、聾者の為の大学であろうと、上智大学であろうと、聾者のクリスチャンを教会の信仰を高めることの出来る一員として受け入れる事をためらう教会であろうとも、その権力組織の中の平穩をかき乱すようにと私に助言してくれたのです。

我々修道会の50周年記念に際し、このパンフレットへの私の寄稿を、ジェラードの為に捧げたいと思います。そして、権力組織の平穩をかき乱すことに、私自身を再び捧げたいと思います。



現在



日本での歩み

フランシス・ハーン



来日当時

私はアメリカのパウファロー市で、第二次世界大戦の最中に生まれました。父の第5人が戦争に参加したので、日本に対する偏見がかなりあり、日本へ宣教に行きたいと言った時には、身内の中で大変な反発がありました。昭和42年9月16日に来日してから6日後に、24才の誕生日を迎えて、

日本の宣教生活がはじまりました。

2年間位、早稲田大学で日本語の勉強をしました。反ベトナム戦争のデモが多くて中々勉強が進まず、同級生の大半は既に2、3か国語も出来、私だけが進歩しないで、遅れを取りそうでした。その事を気にしない、ずうずうしいタイプですので、楽しい日々を過ごしてきました。

しかし、大神学校の勉強が始まったとたんに、現実と直面させられました。神様が弱いものをお選びになって実力者を驚かせ、絶えず計らって下さる父でいらっしゃる事実を私の人生が証します。私のことを良く御存知のオペレート会員や他の方々は今でも、その事にとまどっていると思います。

来日した時に日本の皆に洗礼を授けたかったが、それまでの神様の日本での救いの働きについて、全く無知で非常に貧しい宣教師でした。宣教する前に、自分自身が宣教される必要があることが悟れませんでした。当然、幼児洗礼でカトリック学校で過ごし、終生誓願も立てたので、一人前の信者のつもりでおりました。まだまだ信仰の面に関して程遠い者であることが、全く分からなかったのです。しかし、憐れみ深い神はすぐ私の現実を示され、次の危機に合わせてくれました。

最初の3年間は英語を教えたり、友達を作ったりして一生懸命頑張ってきましたが、頑張れば頑張る程、私が勤めようとした信仰に興味を示す人は1人もいませんでした。更に私自身が自分の勤めているそのもの自体を掴んでない、と少しずつ気が付きました。哲学的な人生のビジョンであれば、日本人は抽象的な話に興味がないし、道徳的な道であれば、西洋より立派な面を築いていることが多いし、何故この国にいるのか、という疑問が強く浮かんできました。丁度、この信仰の危機に晒されて神様が



助けて下さいました。

当初、信者を励ますつもりで新求道共同体のカテケシスに参加して、その後私の信仰の事実が見つけている道が与えられました。その中で発見した事実は、私の言葉と行動は天と地ぐらいずれがあるということでした。福音を述べ伝える前に自分自身、イエス・キリストの出会いが必要なのです。口先ではイエス・キリストは主であると言いながら、行いを通してお金、又自分勝手な生活、自分だけを中心にして生きていることを見せられた私は、神の御言葉、教会の典礼と具体的な共同体によって、少しずつ、主キリストが私の心に触れて変わるように願って歩きはじめました。

この恵み(キリストの無条件の愛)があればあるほど、それによって、日本の皆さんが飢え乾いているものと交わる宣教生活が実現します。生まれた瞬間から今に至るまで頂いた、しかし、つい最近まで深く悟っていなかった、神の無条件の愛と憐れみをもって…神の不思議な御技といえ、私は日本を回心へ導く為に参りましたが、神は逆に日本をとおして、私自身の回心を行わせる置き石の親石となさいました。高ぶるものが低くされ、遜るものが高く上げられるために、これこそ誠の「ネバーエンディングストーリー」、神の愛の話なのです。

この28年間、最初の5年間は東京の大神学校で、その後、高松市に3年間、高知の安芸と赤岡に2年間、新求道共同体宣教チーム司祭として3年間、阿南教会と幼稚園に8年間、1988年から古賀教会主任司祭として8年間をすごしました。私の唯一の希望は神から頂いた許しをできるだけ多くの人と分かち合う日々を過ごし、神様の愛と御摂理が皆にお分かりになりますように、ということです。



現在

個人史

ウェンシー・ラギダオ

1976年3月27日、叙階式のあとで、フィリピン管区の管区長から私に日本に行くということを知りました。ローマの総長から指名の手紙をもらって出発し、1976年10月25日、日本に着きました。2年間の語学の勉強を終えてから、高知行きの使命をもらいました。高知では、ある時5人のオペレート会員たちは50～100人の信者の世話をしていました。そんな時代がありました。信者数を1000で数えるフィリピンから来ましたから、始めの数年はつまらなかったです。

次は、福岡の生き生きした光丘教会に転任しました。数年間一人でやりましたが、司祭の仕事として満足感がありました。1985年頃、フィリピーナのエンタティナーが沢山日本の教会に出て来て、目立ちました。色々な人が私に相談に来ました。思いがけず、このフィリピーナのエンタティナーの仕事に関わりました。

1986年、マニラに休暇で帰った時、フィリピン司教団の移民関係の委員長である司教様と突然に会いました。その時、彼に日本にいるフィリピーナの為のチャプレンの仕事をお願いされました。私は一応賛成しましたが、日本の司教様たちの任命が必要だ、とちょっと考えました。日本の司教様たちからの任命は大分時間がかかりました。チャプレンの仕事は様々な所に行かなければならないし、予定が立たない仕事なので、主任司祭をやめなければなりません。丁度日本の管区長も光丘教会は出来上がった教会なので、教区に返すことを決めました。

フィリピーナのエンタティナー関係の問題は次々出て来ました。種々の支援グループが日本中のあちこちに出かけ、私はそれらのグループに関係しました。私は未組織の助けを必要とするエンタティナーのグループとフィリピン政府との連絡を取るようになりました(NGO)。日本にいるエンタティナーについて話し合いをするために、フィリピン政府の上層部に会い、またコラソン・アキノ大統領にも会いました。

1976年、フィリピンから離れた時、私は日本という環境の中でフィリピーンのために働くことは考えられませんでした。日本の教会での主任司祭の仕事は大変面白かったし、フィリピーナのチャプレンの仕事をもらった時は180度の転換でした。考えられない仕事でした。

私はフィリピンにいたなら、数千人の教会の主任司祭になったでしょう。私はフィリピン人であるからフィリピーンのことはよくわかっているつもりでしたが、日本で出会ったフ



果日当時

ィリピーノから沢山のことを習いました。彼らとの出会いは私を居心地のよい理想的な考えから引き下ろし、現実の貧しい国から来る移民を差別の目で見ると日本人の目、その事実を私はよく教えられました。イタリア人、ポーランド人、アイルランド人等の移民のおかげで信仰が広まったように、神様はこのフィリピンの移民を使っておられるのではないかと。

今全世界に、六百万のフィリピンの移民労働者がいます。それは神様の良い便りが広まるために、昔と同じように、この人たちを使っておられると望みます。私の具体的な仕事は人間的な望みと大分関わっていますが、一つの望みはこれが神の計画の中に入っている、と信じていることです。

沢山のフィリピン人たちは日本に移住し、これからも住むつもりです。教会の中で、それは大きな影響力になります。日本の教会の形はだんだん変わります、このフィリピン人と南米の人達との関係で。私は将来の日本の教会の姿を想像する時、色々な文化と色々な国からの人たちの存在を思い、そう考えるときに何か興奮します。今の教会の様子と違って来ないと思います。

そして、私たちの日本・韓国の管区も最近ではスリランカとイタリアの新しいメンバーが入った事によって、様子が変わりました。私たちの管区は将来様々な新しい司教に入るのではないかと感じます。司祭たちは高齢になるが、心配はいりません。若者たちに私たちの仕事は意味がある、値打ちがあると感じて、それに一生をかけようという気持ちがあれば、新しいメンバーが来るでしょう。私たちの仕事について、若者たちに興味がないなら、私たちは今彼らをひっぱるのに十分ではないでしょう。

それとも、私たちが今やっている方法はもう時代遅れだ、と神様が教えてくださるのではないかと。私たちの若いメンバーはこの日本と韓国色々な可能性のある司教的な仕事を調べるべきです。そして、この日本管区を創立した人たちの今までのパターンだけに従うのではなく、新しい司教を考えるべきです。この使命は神の使命です。私たちはただ彼の僕というだけです。



現在

宣 教

ヴィンチェンゾ・ボルド

ヴィンチェンゾはマウロ・コンカルティと一緒に、1990年5月12日に韓国に着いた韓国の社会や教会をよりよく理解するのに、最初の2年は韓国の言葉や文化に慣れるために努力した。更に韓国の教会の理解を深めるためにその後、召されていたスラン司教区で司牧的な仕事に勤んだ。現在、毎日ホームレスや貧しい人々のための食堂に勤めている。今の仕事に対する反省を次の言葉で提供した。

度々、今の奉仕の形を疑った。熱烈に現代の人間に出会うために、安全な教義や聖なる習慣の「神殿」の境内を去り、平凡な人々の「家」に入った時に、神の日常生活の中の顔を見つけたような気がする。その顔は仕事を探している人の顔、長く息子の誕生を待ちかねている人の顔、友人のふざけを哀れみを持って見ている人の顔だ。

司祭として、神の目よりも平凡な人の目を通して見るのがふさわしくないかも知れない、そこでジレンマを感じ始めた。

しかし、あなた方友人に今までの経験を伝えた時に、あなた方は私を確認し、支えてくれた。あなたが毎日経験している実生活、毎日信じている神に触れることは、つまり、あなた方をありのままに受け入れることは、決して意に外れたものではなく、あなたが望んでいることだ、と伝わってきた。それは教会の本当の姿だ、と言ってくれた。それは、私には大きな自信に繋がった。

私の使命を皆さんに説明した時に、教会を管理し大きな説教をするよりも、違うところにあると説明した。毎日忠実にエプロンを掛け、ホームレスや貧しい人々のテーブルに給仕し、御飯を炊き野菜を準備し皿を洗うことによって、自分の使命を果たしていることを説明した時に、あなた方の顔に涙がぼろぼろ流れた。その時に、私のような奉仕の仕方も教会の中で役割がある、と感じ取った。

こういうような尊敬のある驚嘆のある暖かい涙は、私の疲れ果てた魂のために、香油みたいなものになった。

韓国での私の仕事のビデオを見せた時に、私も感動で咽の詰まるような感じだった。それらは写真だけではない。自分の存在や夢や仕事を分か合った同胞の顔だった。私を受け入れた人、私を愛した人、余分な物を捨てるように助けてくれた人、本物になるように教えてくれた人だ。私の手を取ってこの国の古い伝統の深さを教え始めた人、東洋の美しさである非常に優雅な様子を教えてくれた人だ。…皆さんと写真を分か合ったおかげで、宣教の美しさを再び発見し、味わった。



こういうことで10年間通ってきた司祭生活や宣教生活に、もう一度「はい」と言いたい。今日、毎日の「はい」を誓う。時間的な新しい「はい」ではない。つまり、今までの熱心さ、今までのエネルギー、今までの安心感に基づいた「はい」ではない。しかし、存在上に基づいた「はい」だ。そういう「はい」は妥協や不信、困惑や危機や恐怖があっても、キリストだけに基づいている。新しい「はい」ではない。新たにした「はい」だ。なぜなら、イエスに根づき、忠実なしかも慈悲深い主に根づいている。その主は人間の中に生

き、そして私が様々な方法で出会う主だ。主に愛された貧しい人々の中において、「はい」と言いたい。文化的人種的壁を超えた人間との関わりに、「はい」と言いたい。その「はい」はこわれやすさの中にあり、完全に現代の世にあって、危機を招くものだ。毎日受難を受ける主と共に歩むなら、私の命は再生されることを知っているのだから、労苦と自己放棄に「はい」と言いたい。すべてをなされる神に信用をおいて、希望に満ちた「はい」を言いたい。嵐の中に、神は御自分の弟子に「私はあなたと共にいるのに何故怖がるのか」と言っておられる。



感謝

マウロ・コンカルディ



来韓当時

イタリア・ミラノ出身です。入会したのは1981年で、叙階は1988年です。修学院の勉学を終わってから、韓国に派遣されました。韓国に着いたのは1990年5月12日です。この日韓国到着だけではなく、日本管区オブレート家族の一員になった日でもあります。事実、最初から韓国は日本管区の一部です。それは私には大きな恵みです。

韓国に着いた時に、オブレート会士はいませんでした。ヴィンセンゾ・ボルドと私は新しい宣教地を開拓し、オブレート会のカリスマを韓国の教会に紹介するために、派遣されました。住居もなく、あるのはスーツケースに入ったわずかなものだけでした。西洋からきた私たちにはすべてが新しい。言語も難しい。どうやってオブレート会のカリスマを韓国の教会や社会で活かすことができるでしょうか。それは私たちのチャレンジでしたが、頼れる人は近くには誰もいませんでした。

そんな時、他のオブレート会士がいました。彼らの支援、助言、分ち合いは大いに助けてくれました。私たちと共に歩み始めました。初めて例年の黙想会のために日本にきた時のことをよく覚えています。1990年8月でした。高知修道院で行なわれた黙想会でした。数日前に着いたので、管区長のマホニ神父と一緒に赤岡、安芸、徳島、阿南、鳴門に行くことができました。戻ってきた時に、殆どの会士が高知で待っていました。韓国へ帰る途中、伊丹にもいきました。以降何回も楽しい一時を日本における会士と一緒に過ごし、オブレート会の他の所にもいきました。彼らのよく行なっている奉仕、共に歩んでいる信徒や他の人、直面している困難などを見ることができました。彼らと共にいると、色々な話（管区の話、個人の話）を楽しく聞くことができました。食事をしながら、お酒を飲みながら、夜遅く黙想の家の静かな雰囲気、修道院の懇話室で、その昔話を味わいました。

それに、日本の会士も韓国に来て、私たちの奉仕を見ま

した。しかし一番大事なのは、私たちが新しい曲り角に直面する時に、日本の会士は私たちが静かに手伝ってくれることです。アパートを借りるにしろ、新修道院を買うにしろ、司牧的なチャレンジをするにしろ、個人的な問題に直面するにしろ、常に兄弟がいます。折り、支援の言葉、物質的な支援などで、いつも暖かく受け入れられています。韓国の兄弟に対する愛を良く感じます。

時々、人に次の質問を聞かれます。「何故宣教師になったのでしょうか、何故韓国に行ったのでしょうか」と。常に次のように答えます。キリスト者であることはすべての出会う人を愛し、神は愛であることを伝えることです。場所は関係ありません。そのために自由に、勇気を持って自分の国を離れ、新しい国へ行くことができるでしょう。もちろん、時々困難もあります。そういう時にこそ、オブレート会士の支えは大事です。私にとっては、日本におけるすべての会士のことです。

そのために、韓国の宣教活動は日本のオブレート会士の歴史の一部です。韓国の宣教地は日本の宣教活動の新しい実りです。



現在

エマオ

ジョヴァンニ・ゼヴォラ

ジョヴァンニは最初の二人の宣教師を連れて、1991年9月4日に韓国に着いた。彼は特に、韓国の出稼ぎ労働者のもとで奉仕している。自分の仕事について次のように語る。

多くの人は私の事務所を通った時に、入口に「エマオ」と書いてあると気がつく。この言葉は何だろうと首をかしげる。窓から彼らの顔が見える。あるいは私に直接聞く。「エマオってどう言う意味？英語の辞書を引いても見当たらない」

何故労働者の指導を行なう事務所にそんな名前を付けたのか。多くのキリスト信者なら、福音の次の節によく馴染んでいるだろう。そこで復活されたイエスは、自分の故郷エマオに向かって歩いている弟子たちと一緒に歩んだ。いくつもの理由で「エマオ」という名前を選んだ。

先ずは二人の弟子は、ある一点から他の一点まで歩んでいる。彼らも「移民者」と言えるだろう。出稼ぎ労働者も移民者である。

そして、この二人はイエスに全き信頼と期待を持って弟子として従っていたが、イエスの死によって絶望に陥っていた。出稼ぎ労働者の状況を考えて、彼らも自分の国を離れた時に、大きな希望をもって韓国にきたが、実際こちらにきてみると、期待外れでいっぱい。皆国に残した両親や兄弟のために出稼ごうと思ったが、実際は給料の問題、保険の問題、事故、不安などがある。

その二人の弟子に近づいたイエスはどうしたか。「私です。救い主です。信頼して下さい」と言っただろうか。違います。「移民者」となった。彼も肩を並べて共に歩んだ。先ず彼らの話を聞いた。少しずつ労働者の実際の状況を掴んでから、イエスの救いを見い出すことができる。

エマオ、それは移民者と共に歩み、彼らの状況を理解することは私たちのアプローチである。彼らのために働くだけではなく、共に歩むことだ。彼らの疑問を聞く前に解答を出さない。私たちが友として認め受け入れた時に、キリスト者であることの意味を初めて理解できる。エマオの事務所を通して出会う人の殆どはキリスト者ではない。そのために、私たちが現実生活の中で苦しんでいるキリストの本当の姿を見ることが出来る。

要するに、エマオは単純に言うといエスの模範に従うことだ。つまり「主は豊かであったのに、あなた方のために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなた方が豊かになるためだったのです。」Ⅱコリント8:9



韓国派遣

マウリツィオ・ジョルジアーニ

どうしてか分かりませんが、子供の時から私には、世界の東の方に憧れがありました。小さい時には宣教師になるつもりはなかったが、結局1992年5月に受けた私の最初の派遣は韓国でした。1993年1月5日、ソウルに着きました。そしてオブレート会の宣教師として、韓国で30歳の誕生日を祝いました。

オブレート会の韓国のミッションが始まったのは、1990年です。そして、向こうで働く他の3人の宣教師を知っていましたから、私は韓国に行くのはうれしかったです。もちろん、沢山の夢と望みを持ちながら韓国に着きましたが、いつものように事実は私の想像とは違いました。このミッションは当初から、皆一人一人が失敗と幻滅に苦しみました。

到着してから数日後に、語学の勉強が始まりました。2年間の私の一番中心的な仕事は韓国語を習うことでした。その時間はたいへん面白かったが、時々はがっかりしました。韓国語が下手でしたから、韓国人との深い出会いは出来ませんでしたし、私の夢は壊れました。東の世界は落ち着いていて、既想的で、親切な所と思ったのに、韓国人は1日に14時間働き、1年に3日か4日の休みしか取らないことを知りました。人々は道を走っています。若い人達は勉強でいっぱいストレスを感じています。

2年勉強すれば韓国語はバラバラになると思ったのに、2年経ってまだ初級です。前に感じたことのない飢えと渴きと淋しきの気持ちが私の人生に入ってきました。韓国の派遣の旅は自分の現実に出会う時期でした。2年の試練は大事でした。神様と韓国にこの時期のために感謝します。私の信仰の旅にとって、長い2年間のステップでした。

第二のステップは住む場所を見つけることでした。どういう風に韓国の教会を手伝うことが出来るのか、その第二ステップはオブレート会の共同体と個人の戦いでした。韓国に着いて3ヶ月後、私たちはそれまで住んでいた家から出て、他の家を探さなければなりません。やっと8ヶ月後、1993年12月に、ある家を見つけて買いました。私はあの時までホームレスの経験はなかったが、今その経験のおかげで、本当に自分の住む場所がないならどんなに働くのに難しいか、を経験しました。

私たちはこのミッションを始めるために、この韓国の教会の中に、私たちの場を見つけなければなりません。そうするために、いろいろな小教区で働き、グループの中に入りました。貧しい場所で働いて、そうしながら心の中に不安と疑問を持ちました。やっと私たちはある司牧的な集いを決めました。貧しい人のための無料食堂をする、も



う一つは働きに来ている外国人のための司牧的な仕事、病院の中での病人の司牧、若い人たちの集いを決めました。神様は私たちと一緒に共同生活をしたい若者を与えてくださいました。今も一人は神学を勉強しています。

語学の勉強をしている間は土、日が休みだったので、他のオブレート会員が働く場所を訪問しました。教会で韓国語の子供のミサを立て、他の御ミサの手伝いをしました。ある時は数ヶ月スूपキッチンで働いて、週末に教会の仕事を手伝いました。それは私の韓国の教会と韓国人へのアプローチの始まりでした。語学の勉強が終わった時に、障害者のグループの手伝いをし、シスター達の経営する盲人センターで手伝いをする招きがありました。今、その所で指導者として働いています。

韓国の青年達はバランスの崩れた状態ですから、青年達のために何かしなければならぬ、という気がしたので、いろいろな集まりをして、教会で、大学で、彼らを訪ねました。相手を尊敬しながらゆっくりとアプローチしました。何かをする前によく聞きます。初めに語学の障害があるから、人と通じ合うことは出来ないと思ったが、一緒に暮らして話を聞いて、苦しみと問題を味わうことで、彼らがもっと私の心の中に入ってきます。そして今、私の愛と配慮は自然になりました。今私は肯定的な関わり合いもあると感じて、私を受け入れてくれていると感じています。

この探索の時期に、私は失業している人の気持ちを感じました。読むこと、書くこと、話すことが出来なかったので、教育のない人のようでした。ですが、全部神様からの恵みであったという気がします。貧乏な人の中で働く前に、私の心は先に貧しさを感じなければなりません。この恵みを頂き、そのおかげで私の人間性と理解力は成長しました。ですから、韓国人の現実を知って、その人達にほれこ

んで、私には又夢が始まりました。

私たちは皆、本当の現実に向かうために夢が必要だと分かりました。この韓国のミッションはまだ入口の段階です。いろいろなプロジェクトを決めています。私の韓国の発見はまだ終わっていません。この人々から沢山のことを習わなければなりません。けれども、宣教師になるための秘

訣を見つけました。それは長所と短所を持っている彼らの全てを、ありのまま受け入れて韓国人を愛することです。この旅を始めたのは神の恵みです。そして、あなたたちの折りで、あなた方が私の旅に同伴してくれることを望んでいます。

私と日本

ジュード・ピリスブッレ

私の日本での生活や私たちの過去を、もう一度振り返ってみるのは大変良いことです。オペレート会員として、この日本派遣の50周年を記念します。長い道を歩いてきました。大へん良い思い出もあるし、悲しいこともありました。これらは全部イエス・キリストのメッセージを広めるために貢献しました。私はこの宣教地では新しいつはみですが、ここまで来る道について少し話したいと思います。

1992年8月に叙階されて、私はすぐにスリランカのトリンコマリ教会に派遣されました。人の最初の愛は忘れられない、という諺があります。これは本当です。その最初の教会の喜びは忘れられません。この派遣の知らせをもらった時はがっかりしました。私の司祭生活には他の期待があったのです。けれども、その貧しい人たちと一緒に働き始めてから、その時の気持ちは大変大きな期待に変わりました。そこでの生活は困難なものでした。その地方は戦争中で、昼も夜も爆弾、砲撃、銃撃の中で暮らすのは大変でした。けれども、彼らと一緒に暮らし、彼らの問題を聴いて、それに答える喜びと満足感をこの一頁で表現することは難しいです。

二ヶ月経って、突然オペレート会の総長から新しい派遣の手紙を受け取りました。そこには、日本に行くと言っていました。私にとってはショックでした。なぜなら、丁度教会の

生活が始まったところでしたから。けれども、2年の準備期間を与えられました。その間、綱引きのような状態でした。日本に行く準備をしなければならぬし、同時に教会の仕事をもっと頼まれました。学校での宗教の時間の担当を依頼されたこともあったし、全地区のカテキスタの係にもなりました。使徒職の仕事は手一杯でした。

日本に行く準備をしているのに、日本についてのビジョンや考えは余りありませんでした。私は手紙でいつも買



問しました。オペレート会員はその国で何をやるのですか？ 頭の中でオペレート会員はいつも貧乏な人と働くのでしょうか、難しい所とか弱い人と共に仕事をするのでしょうか、と考えました。なぜなら、私たちのモットーは「貧しい人に福音を伝える」ことですから。

このように想像しながら、1994年4月に日本に着きました。日本の本当の状態を見ながら、私の日本についての考えは全部変わりました。貧しい人はどこにいますか？ 誰と一緒に働くのですか？ このような疑問を心に持っていました。この疑問は少しの間だけ残っていました。実際の日本を経験し、日本は物質的にお金を持っている国ですが、他の所で貧しいのではないかと思います。ある人は群衆の中に自分を見失っています。私はだんだん、この状態はスリランカと大分違うとわかりました。また一方では、私はまだ自分に質問を続けます。私の特別の召し出しは何でしょうか。

今までの私の日本での日々は殆ど語学の勉強でした。最初は、スリランカの状態と全部くらべました。けれども、違う文化、食べ物、考え方等々、この状態をもっと具体的に見直しました。日本の食べ物を食べることができるか心配でしたが、全然問題ありませんでした。だんだんライフスタイルになれ



てきて、語学の勉強を終えて本当の仕事に入るのを期待しています。日本で働くのは簡単ではありません。あらゆるミッションにはチャレンジがあり、特有の難しさがあると思います。その場合、日本も例外ではありません。私は、日本で働く

兄弟と一緒に、日本と日本人にキリストをもたらすために働くのがうれしいです。

主よ、あなたの平和のしるしとなるように私を形造ってください！

経 験から学ぶ

ブラドリ・ロザイロ



1992年8月22日、叙階式が終わって後、スリランカのロンボで2年間、病院のチャプレンを経験しました。この経験は、オペレート会員として大変有意義な仕事であったと確信しました。というのは、一番助けを必要とする人に手をさしのべるこの奉仕職は、カウンセリング、いやし、なぐさ

め、特別に聖体と病者の秘跡をさずけることにあるからです。

病院のチャプレンの仕事は、主に存在そのもののミニストーリーです。この聖職をもう少し説明しますと、対話、考え、感情は言葉で話し、また沈黙の静けさの中で伝わります。

患者との付き合いでは、直面している本当に困ったことに会い、できるだけ慰めたいということがよく起こりました。意味のある深い対話の中で、家庭、経済、信仰、道徳の問題がかかわっていました。ですから、チャプレンは色々な役割と関係があったと思います。お互いの話し合いが終わってから、私はその人の司教的なケアをスタートできました。そのケアのためには、その病人が今、直面している病気以外に、その人の価値観、希望、失望を尊敬しなければなりません。

その患者の苦しみをとり除くよりも、その人の一生の、もっと深い意味を探さなければなりません。ですから、ある程度まで、私の存在がこの苦しんでいる人に神の救いの愛を伝えることが実現できたと思います。このポイントが、私のチャプレンの仕事と他の医学の関係の人の違いであると思います。病院に入院している患者の立場から考えると、チャプレンの奉仕は大変価値があると思います。病人のために働くのは簡単なことではありません。最初、私は熱心にやりたかったのですが、病院の臭いや、人々の痛みを見るのがいやでした。けれどもその場所になれてから、私はその仕事を愛しました。その経験は心を豊かにし、勇気づ

けられ、興味深いものとなりました。

日本に行くことになったその年の9月に、ジュード・ピリスプッレ神父様と一緒に、日本にきました。翌月から、名古屋YWCAで2年間の語学の講座を受けました。そのうえ、南山大学で日本の歴史と社会についての勉強もあったので、大変忙しかったのですが、これも大変興味のあることでした。

日本語学校を終えて、古賀教会へ派遣されました。日本での初めての宣教でした。司祭になってから、小教区という場で奉仕するというのも初めてでした。不安があったが、楽しみもありました。喜んで奉仕活動を始めました。1996年の4月から4ヶ月、徳島教会に派遣されました。九州から四国に移ることも大きな経験になりました。徳島での体験は小教区の大事さを教えてくれました。

今までの勉強とこれから味わう体験はおそらく、日本での奉仕活動に役立つでしょう。



召命の歩み

八木 信彦

この道はいつか行く道。1984年10月7日は確か日曜日だったと記憶しています。振り返ってみると、この日が始まりの日だったと思います。そして、それはロザリオの聖母の記念日でした。当時私は、徳島県内にある精神薄弱児通所施設に勤めておりました。この日は仕事の関係である児童福祉施設の運動会を見学する予定でした。ところが朝起きてみると、どことなく体がだるく、体温も37.5度ほどありました。運動会見学を断念し、その日は休を休めました。

1日休めば回復すると思っていましたが、1週間たっても熱は下がらず、時には40度近くも熱が出て、結局平熱に戻ったのは約3週間後でした。その間大病院で受診したところ、肝臓に障害があるということで、即刻仕事をやめ、自宅で療養しなければなりません。今まで仕事や時間に追われていましたが、自宅療養中はゆっくりと時間が流れ、読書をしたり、物事をゆっくり考えられるようになりました。

そんな中で、自分が神様からとても大切にされていることを強く感じ、何か神様に恩返しをしたいと思うようになり、召命の道に関心を持ち始めました。2年近く赤岡教会でシモンズ神父さんと共に過ごし、ボランティア・ビューローを通じていろんな分野の福祉に携わりました。中でも、私が福祉の道を歩むきっかけとなった博愛園（養護施設）の子どもたちとの素晴らしい出会いがあり、この2年足らずの期間は私にとって非常に充実したひとときでした。

徐々に召命の道へのあこがれが強くなり、1987年3月20日(日)、初誓願式を迎えます。その後、名古屋の南山大学で修道士になるための勉強をする傍ら、教会学校、手話による聴覚障害者の方々との交流、名古屋教区社会福祉事務

所でのお手伝い等、名古屋での養成期間中もやはり福祉分野での活動が主でした。

1991年8月4日(日)、私の誕生日に終生誓願のお恵みをいただきま

した。前夜はなかなか眠れなかったことを覚えています。とにかく、この日が新たな道の出発の日でした。その年の9月に海外研修に出发し、シンガポール(4日間)、オーストラリア(半年)、インドネシア(1カ月)、スリランカ(1カ月)、香港(10日間)、それぞれのオペレート会を訪問し、翌年5月に帰国しました。

その5月から赤岡教会での生活が再び始まり、現在に至っています。ボランティア・ビューローでお手伝いさせていただきながら、召命係、養成の仕事、博愛園、高松教区での青少年司牧等と数多くの役割をいただいています。それぞれの役割を十分果たしているかどうかは不安です。ただ言えることは、どの役割にも喜びを持って携わることができるのは、私にとって大きなお恵みだと感謝しています。

私の召命のきっかけは色々あったと思いますが、元を辿っていけば、1984年の10月7日(ロザリオの聖母の記念日)に遡ると思います。私はロザリオの祈りが好きで、それ以前からも通勤途中とか、時間があるときに唱えていました。マリア様がいつも温かく私を見守ってくださっていたことを強く感じます。そのマリア様に自分自身を捧げるこのオペレート会(汚れなきマリアの献身宣教会)の一員であることに、私は誇りを感じます。

これから出会う若者たちに、喜びを持って輝かしい顔でこう答えていこうと決心しています。この道(召命の道)は本当に素晴らしい道だと…。



初誓願当時



現在

これからです！

ジェームス・ジェヤチャンドラン

私はスリランカのジェームス・ジェヤチャンドランと言います。スリランカはインドの南の方にあるけれども、私はスリランカの北部のジャフナで、1967年9月17日に生まれました。その地方は勿論タミール語です。ヒンズー教の雰囲気の中で育っています。母親は父親と結婚した時に、カトリックに改宗しました。7人兄弟(男6人女1人)で下から2番目です。勿論、村立の小学校や中学校で勉強しました。中学校を終わるあたりから、一生を神に捧げたい気持ちになりました。

後期の試験が終わってから、自分の希望を両親に打ち明けました。母親を除いて、家族全員が反対しました。しかしオプレート会の神父の支えを受けて、1983年に小神学校に入りました。入学してから、厳しい識別の下で正しい道に入ったことを確認しました。1988年に哲学の勉強を終え、修煉期に入りました。創立著のカルスマを研究し、自分への呼び掛けという召命を確かめる時期でした。神学を勉強している間に、終生誓願を1992年に立てました。



いよいよ司祭叙階の準備に係ったのです。インドで特別の祈り方(アシラム)を経験出来ました。1994年1月15日、叙階の恵みを受けました。総長からの最初の任務は韓国への宣教でした。急なことで、最初は戸惑いとショックでしたが、神の偉大な支えを受け、行くことにしました。司牧の訓練のために1年間小教区司祭、1年間説教者として本国に残りました。1996年4月29日に韓国に到着しました。キムポ空港に到着した時に、オプレート会の兄弟たちにすぐ受け入れられて、暖かい感じがしました。

赤ちゃんのような生活をしています。赤ちゃんのようにしゃべり始め、食べ物になれ始めています。韓国語と韓国の文化を理解するために学校に通っています。間もなく教会や社会と共に働き始めるところです。つらい日もあります。皆さんの祈りと支えや神の恵みによって乗り越える力が授けられるのだと思います。よろしくお願ひします。



神様の使命における私の役割

ジミ・デルサリオ

私は、外国宣教は召命における神からの呼びかけである、と考えています。私が初めて外国宣教について考えたのは、修練士の時でした。フィリピンの人々の深い信仰にふれる伝道経験を通して、非キリスト教国など、キリスト教の信仰がまだ広まっていない場所に関心を持つようになったのです。霊的指導者に相談しましたら、祈りによって神のお導きを求め続けるように、と励まして下さいました。

私は、どの国に行きたいかについては全く考えてはいませんでしたが、神学生の時に、再びこの使命を強く感じるようになりました。院長が、行きたい国について尋ねて下さった時には、アルゼンチンと答えました。

アルゼンチンのスペイン風の文化と言葉が、フィリピンにとっても近いからです。しかし、さらに聖霊のお導きを求め続けました。

私が助祭に任じられる頃に日本のオブレート会が、より多くの宣教師をと強く求めていました。総長も、アジア人が隣国のアジアの国々を助けることを勤めておられましたので、フィリピン管区長は、私にアルゼンチンではなく、日本にいけるかどうかを尋ねられました。

日本への宣教師を増やしてほしい、という要望があることは知っていましたので、私は即座にこの挑戦を受けることに決めました。日本は、アジアの中でも特にキリスト信者が少ない国ですので、この呼びかけを緊急なものだと感じました。神学修士取得のための翻訳論文「Redemptoris Missio」の影響もあって、私は日本に行くことにしたのです。教皇自身も、1995年1月の世界若者の日の為にフィリピンにいられた際に、アジアにおける宣教にふれておられました。アジアは非キリスト教国が圧倒的に多

いので、日本への宣教が、大いに求められていたのです。

日本に来る前に、カロカン市の御恵の聖母小教区で6ヶ月間助祭を、また新たに任命されて司祭を経験しました。フィリピンでは、秘跡や宣教の仕事に関わる人はとても多いので、私は日本のような宣教地でそんな豊かな経験を得たい、という思いを強く感じました。

日本の人々についての以前の私の印象は、勤勉だということでした。日本での宣教に私が関わっていくのなら、教育がそのひとつの分野になるだろうと思っていました。というのは、修練期の前に、私はフィリピン大学で1、2年程哲学を

教えていたからです。また、私が自然環境哲学の修士号を取るために学んだ事を、高度に工業化された生活の日本人々と分かちあえるのではないかと、とも考えていました。

1996年1月8日に日本に着いて最初の仕事は、日本語の勉強でした。初めほどの漢字も同じに見えましたが、最後には私にとって、意味を持つものになりました。漢字は日本人の経験を表わす道具の一つですし、また、日本人に神の愛を伝える宣教の道具でもあります。

私は、毎日、日本人の良い性質、例えば、柔らかい態度や親切など

を発見し続けています。神は彼等と共におられるのです。宣教師は修道者として来ることもあり、また、一般の信者として(外国人労働者のように)来ることもあります。日本人の中での神の存在の目に見える証人なのです。

私は、日本社会が、日本や世界中で最も貧しい人々に仕えている情景を思い描いています。

私の役割は、日本への神の使命に協力することなのです。

